

川勝平太論序説

いま人類社会は大転換期を迎えている。この大転換期に対応する二十一世紀の歴史家は、少なくとも最低つぎの条件を備えていることが必要である。

まず、いうまでもないが、世界に情報を発信し、世界的レベルでの交流が可能なこと、従って世界に受容されるためには、英語はもとより、あと二ヶ国語の言葉に通じていなければならぬ。国際会議のオーガナイザーとしてフォーラムを組織する能力、また少なくとも外国語で出版された著書または編著があることが望ましい。

その上で、新しい歴史家とはグローバルな視野に立つて、従来の歴史的常識に挑戦する歴史家でなければならぬ。というのは、従来私たちが明治以来長い間教えられ学

角 山 榮

んできた西洋史、東洋史、世界史は、主としてヨーロッパ人が書いた欧州中心史観、ヨーロッパ優越史観ともいうべきもので、とくに二十世紀後半における著しいアジアの台頭の中で、アジアの主体性に立つての歴史の見直しを迫られることは避けられないからである。しかもそのアジアの歴史の再検討の過程で、とくに日本の役割は何であったか、また今後日本はどうあるべきかという問題もまた避けて通れない。従って従来の東洋史、西洋史のアプローチに対し、根本的な批判を加えるとともに、新しいアジア史像提唱と日本の役割についての理論的現実的課題に答える必要がある。

こうした二十一世紀が直面する課題に対し、グローバル

な視野から文明論的に対応しうる日本の歴史家は、いまのところ決して多くない。敢て上記の条件を充たす歴史家をあげるならば、川勝平太氏はその一人ではないかと思う。

川勝平太氏は昭和二十三年（一九四八）生まれ、現在もつともエネルギーに研究、著作、講演、政府委員等各種委員会委員として活躍している歴史家である。

まず彼の歩んできた道を振り返ってみておく。一九七二年、早稲田大学政治経済学部卒業、その後同大学院経済学研究所修士、博士課程で日本経済史を研究したが、彼のアカデミック・キャリアの出発点となった。その後オックスフォード大学でP・マサイアス教授の下で学び、そこでPh.D.を取得したことで川勝氏の視野は一挙に拡がり、やがて国際的歴史家としてのキャリアを歩む軌道が敷かれた。

オックスフォード大学のP・マサイアス教授といえ、日本でも皇太子の留学時代の指導教授として知られている。マサイアス教授はイギリス経済史研究の最高の権威の一人として、イギリス経済史学会会長、また国際経済史学会理事として活躍された人である。日本では同氏の主著

The First Industrial Nation, 1969, Second Edition

1983が、小松芳喬監訳『最初の工業国家（改訂新版）』（日本評論社、一九八八年）として出版されているが、同訳書出版に関し、川勝氏が深く関わったことが、同書の「あとがき」に記されている。

マルクスがやり残した外国貿易と世界市場

ふつう外国に留学すれば、その国の学問にべつたりひたるものが多いなか、元来日本経済史で木綿という世界商品の研究から入った川勝氏にとって、オックスフォード留学はいままでの日本史研究にない広い視野のもと、日本の木綿をグローバルな視点から見直す絶好の機会となった。このことはのちに再び触れることにする。

一方、彼の学生時代は第二次安保（二七〇年安保）の時代であった。とくに早稲田大学は激しい大学紛争の中心舞台になったことで知られる。彼自身直接渦中にいたわけではないが、その影響を受けなかった学生はいなかったであろう。そうしたなかで戦後日本の学界の主流をなしてきたマルクス主義史学、とくに一国資本主義的、講座派的歴史研究からの脱却が模索されていた。川勝氏もそうした問題を抱いていた学生の一人であった。「大塚史学」は外国貿

易を捨象した閉じられた一國資本主義モデルの展開であるとすれば、そのフレームワークを突破し、新しい時代環境に適合的な理論に再構築するためにはどうすればよいのか。

一九六〇年代当時、世界最大の関心事は米ソ冷戦構造がベトナム戦争というかたちで泥沼化し、ますます激しさを加えつつあったことである。これにいち早く対応したのが、アメリカの経済史家W・W・ロストウである。彼は反共的な経済成長史の著作『経済成長の諸段階——非共産党宣言——』（木村健康他訳、ダイヤモンド社、一九六一年）を出版するとともに、自らアメリカ政府の政策顧問としてベトナム戦争の戦略・政策に参加したのである。

ロストウ理論は新古典派の経済成長理論を踏まえた経済史である。川勝氏は新古典派の経済史には殆ど関心を示さず、彼が模索した方法論は、もっぱらマルクスの体系の中で新しい切り口を見出すことであつた。そこで彼はマルクス経済学批判の「プラン」の中で、マルクスがやり残した外国貿易と世界市場について、経済史の実証研究を志し、そうすることによって新しい展望を開こうと決心するのである。彼がまだ早稲田大学の学生の頃である。

彼がマルクスの「プラン」からヒントをえたことは確か

であろうが、当時経済史の学界状況もまた同じ方向に向かつて動いていた。すなわち産業革命をゴールとする封建制から資本制への移行期の研究から、むしろ産業革命をスタートとする工業化の世界各国・各地域への波及の問題を中心に、それと関連して外国貿易をつうじての商品流通・経済のグローバルな拡大、世界市場の形成、帝国主義などの諸問題がいつせいで出てきて、経済史研究が新しい段階にきていたことは事実である。

そうすると、当然工業化の世界への波及のなかで、かつて文明の中心として栄えたアジアが植民地、半植民地となり、低開発国にとどまっているのに、どうして日本はひとり非ヨーロッパ諸国の中で工業化・近代化に成功したのか、という問題に直面する。いまではこのような問題提起には真新らしさを覚えないが、大塚史学の全盛期には日本はどうしていつまでも封建的なものが残っていて近代化しないのかという問題提起がむしろ支配的であつたのである。

同じアジアの中にありながらどうしてひとり日本が近代化・工業化に成功したのか。いや日本はアジアではないのだ。脱亜入欧に成功した日本、それには江戸時代二六〇年

の長い間にいかに近代化・工業化への基盤づくりが着々と進行していたかという「鎖国」体制の再検討を促す一方、近世日本の大衆衣料であった木綿に関し、川勝氏自身新しい問題を提起することになる。

川勝氏の提起した新しい問題とは何かというと、開国後日本の輸入品の中心であったのがイギリス製木綿である。ところで近代経済学の比較生産費説の立場、またマルクス主義の発展段階論の立場からすれば、商品の価値は生産力に反比例するから、低い生産力段階の日本でつくられた木綿は、高い生産力段階にあるイギリスでつくられた木綿の競争には勝てない。いきおい市場から駆逐されざるをえない。

従って比較生産費説からすれば、工業において優位に立っていたイギリスは綿工業に、農業において優位にあった日本は綿作に專業化するのが有利であるはずである。だが、日本綿業の歴史はその理論的予想を裏切った。日本では綿作が凋落し、一方、綿工業は飛躍的發展をとげ、早くも第一次大戦前にアジアにおけるイギリスの最大の脅威のしあがった、というわけである。(川勝平太著『日本文明と近代西洋——「鎖国」再考——』、NHKブックス、一九九

一年、一九頁)

大切なことは問題を上手に出すことだ。そうすればそれが答えである。

これは十九世紀フランスの文芸評論家サント・ブーヴの言葉である。川勝氏の魅力はサント・ブーヴのこの言葉の中にある。こうして彼が巧みに提起した問題に対し、彼が与えた新しい解答とは、実は「棲み分け」論であった。

ひと口に木綿といっても、起源は一つであるけれども、伝播の歴史的過程において、ヨーロッパでは長繊維綿——細糸——薄地布、東アジアでは短繊維綿——太糸——厚地布が定着していた。従ってイギリス製木綿が入ってきてても、アジア市場はほとんど影響を受けなかった。この点、木綿を衣料とするアジアの生活文化とそうでないヨーロッパとの違いが、フリードリッヒ・リストのいう保護関税の役割を果たしたといつてよいのである。むしろ問題はアジア内でのインド、中国、日本の間の激しい競争に移るのである。

唯物史観から生態史観へ

川勝氏は木綿の研究をつうじ、近代商品の中に文化を発

見し、文化が経済の歴史をつくることを痛感した。そこで彼はいままで日本の知識人の多くを把えてきた唯物史観と決別し、彼自身独自の新しい経済史の方法論を模索する。その過程で彼が見出したのが、ダーウインの進化論に抗して、「棲み分け」理論を提唱した今西錦司氏の「自然学」である。

いままで日本の歴史家とりわけ経済史家は、唯物史観かさもなければ、それと方法的に対立するドイツ歴史学派、なかでもマックス・ウェーバーの理想型理論^{イデアル・タイプ}、あるいは新古典派経済成長論、またフランス・アナル学派の理論など、主として先進西洋諸国の歴史理論に依存してきた。大塚久雄氏は唯物史観とマックス・ウェーバー、福田徳三のドイツ歴史学派、安場保吉氏など戦後アメリカ留学の経済史家の新古典派経済成長論などがそうである。しかし川勝氏は違う。敢て日本の生物学者・今西錦司氏から方法論を継承するという道を選択した。川勝氏にとって今西「自然学」を選んだことは、銜^{てら}いでも何でもなく、西洋の既成の方法論では彼の意に充つるものがなかったからである。

今西錦司氏は野外観察（フィールドワーク）という学問

スタイルを確立し、それをつうじて自然界では種社会同士の関係が弱肉強食の自然淘汰ではなく、「棲み分け」であることを発見した。川勝氏がこの今西・棲み分け論をベースに、東アジア木綿とヨーロッパ木綿の棲み分けを説明しただけなら、それとおり一辺の説明はできて、それだけに終わってしまったに違いない。しかし川勝氏がふつうの歴史家とちがうのは、今西理論から入って今西理論の範囲（自然社会・狩猟採集）を越え、棲み分けの破壊時代つまり文明段階を考察の対象とし、これに彼自身のユニークな文化・物産複合論を展開したことである。

この文化・物産複合論を使って説明したのが、十六世紀アジア物産複合のヨーロッパに対するインパクト、アジア文化・物産に憧れて展開したヨーロッパ近代史、そしてヨーロッパの脱亜過程に達成したイギリス産業革命といった一連の近代ヨーロッパの現象である。とくにイギリス産業革命の起源を、こうした脱亜過程とみる見解は、産業革命の起源に関する研究史上、エリック・ウィリアムズの『資本主義と奴隷制』（一九四四年）以来の画期的な見解である。すなわちウィリアムズは産業革命成立にアフリカ奴隷及び奴隷制がいかに大きな犠牲的貢献を果たしたかを明ら

かにしたが、川勝氏はアジアの文化・物産のインパクトの効果がいかに大きかったか、それだけに脱亜過程がいかに文明史を根底から塗り変える画期的な現象であったか、を明らかにした。アフリカといいアジアといい、これらの地域はヨーロッパ人にとっては野蛮の代名詞であり、民族的優越感と誇りの対象として接してきたところである。それだけにウィリアムズ・テーゼはイギリス学界では容易に受容されなかったように、川勝テーゼも世界で認識されるにはかなりの時間を必要とするであろう。

両者の関係はそれだけではない。実はそのエリック・ウィリアムズと川勝平太とが、実際に一本の糸で結ばれていたのである。というのはいこうである。大塚久雄氏が十八世紀イギリスの中産的生産者層の理想の体現者で、しかも近代的人間類型の理想型と指定したのが、ダニエル・デフォーの『ロビンソン・クルーソー』の主人公・ロビンソン・クルーソーである。そのクルーソーの舞台になったのは、川勝氏によれば、カリブ海に浮かぶトバゴ島であったという。

トバゴ島でのクルーソーは大英帝国の支配者であり、フライデーは奴隷である。そこで日本を含め非ヨーロッパ圏

の人間と共通するのは、従属的立場に置かれた青年フライデーであろう。そのフライデーがどうなったかといえば、真に自立した姿が、カリブ海の指導者と仰がれたトリニダッド・トバゴの初代大統領エリック・ウィリアムズ自身ではないだろうか。というわけで、川勝氏は「大塚史学」を批判しながら、自分自身をエリック・ウィリアムズに重ね合わせるのである。

こうして川勝氏は唯物史観、大塚史学に背を向けながら、今西「自然学」から京都学派の文明論、梅棹忠夫の『文明の生態史観』に急速に接近してゆく。梅棹・生態史観は戦後日本が生んだ画期的文明論である。これによって世界は初めて日本文明を独自の文明として承認するに到った。因みにアーノルド・トインビー著『図説歴史の研究』（原著、一九七二年刊、桑原武夫他訳、一九七六年、学習研究社）では、日本文明を朝鮮文明、ヴェトナム文明と並んで「シナ文明の衛星文明」と位置づけていたが、最近ハーヴァード大学政治学教授サミュエル・ハンチントンはその著『文明の衝突』（原著、一九九六年刊、鈴木主税訳、一九九八年、集英社）において、「一つの文明圏としての日本の特殊性」という形であれ、日本文明を西欧、イスラム、中

国、ヒンドゥー、東方正教会、ラテン・アメリカ、アフリカと並んで、世界の八大文明圏の一つに位置づけられている。トインビーからハンチントンへはその間僅か二十五年弱、日本文明をみる世界の眼が大きく変わったといつてよいであろう。

ところが梅棹理論には、一つの難点があると川勝氏はいう。

すなわち、第一地域である日本と西ヨーロッパにおける社会変容については、ともに遷移が順調に進行して極相にいたるといふ植物群落の比喩があるだけで、説明が不足していると川勝氏はいう。この不足している部分を「海から洗う」かたちで、梅棹理論を補足したのが、彼の『文明の海洋史観』（一九九七年、中央公論社）である。本書が十五、六世紀アジア海域の繁栄と日本史の見直しを提起した功績は大きい。その構想は最初早稲田大学『政治経済学雑誌』第三二二三号（一九九五年七月号）に「文明の海洋史観——試論——」と題して発表され、やがて加除改筆によって『文明の海洋史観』に収めて出版されたものである。

川勝氏の海から見た新しい歴史像は、NHK教育テレビ人間講座『近代はアジアの海から』（一九九九年七月—九

月）の題のもとで全国に放映されたことはまだ耳新しい。川勝史学の全貌はいまのところ、この「人間講座」の中に凝縮されているとみてよいが、現実への政策的関心の強い川勝氏は、二十一世紀日本のあり方として「富国有徳」論を提示するとともに、国土計画として「庭園の島（ガーデンアイランズ）日本」構想を打ち出している。

野田宣雄氏は「マルクスからデータベースまで——日本における歴史観の変遷——」（『アステイオン』第五十二号、一九九九年十一月）において「現代はなにか特定のイデオロギーや傾向と結びついた歴史観が優勢を誇る代りに、才能ある歴史家個人が大胆にみずからの歴史観を語る時代」であるとのべているが、川勝氏もその代表的な一人である。彼は日本の歴史学界に革新的新風を吹き込むのみならず、海外にも影響をもちうる国際的歴史家として活躍することを期待するものである。

（つのやま さかえ・和歌山大学名誉教授）